



第45回日本生物学的精神医学会年会
ランチオンセミナー1

📍 現地開催

うつ病と認知症の関連性 ～前駆状態か危険因子か～

座長

中川 伸 先生

山口大学大学院医学系研究科
高次脳機能病態学講座 教授

演者

馬場 元 先生

順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院
メンタルクリニック 教授

開催日

2023年11月6日(月) 12:10～13:00

場所

第1会場 (万国津梁館 1F サミットホール(1/2))
〒905-0026 沖縄県名護市喜瀬1792番地

本セミナーは現地開催を予定しております。

- 本セミナーのご参加には第45回日本生物学的精神医学会年会のホームページより参加登録が必要となります。以下URLをご確認の上、事前参加登録をお願いいたします。
<https://www.okinawa-congre.co.jp/jsbp2023/>
- 本セミナーは整理券の配布はございません。直接会場にお越しいただき、先着順にご入場いただけます。
- オンデマンド配信予定はございません。



うつ病と認知症の関連性 ～前駆状態か危険因子か～

馬場 元 先生

順天堂大学医学部附属順天堂越谷病院 メンタルクリニック 教授

うつ病は後に認知症を発症するリスクが高いことが多くの疫学的調査で示されている。しかしこれらを繋ぐ生物学的背景は明らかになっておらず、高齢者のうつ病が認知症の前駆状態なのかまたはうつ病への罹患が認知症発症リスクを高める危険因子なのか議論されている。

疫学的調査ではうつ病の発症年齢が若く病相回数が多い、つまり暴露が多い程認知症になりやすいのであれば、それは危険因子であることを示唆し、逆に高齢発症で認知症発症までの期間が短ければ、それは前駆状態であることを示唆する。しかしこれまでの疫学的調査では両方のパターンが報告されており、結果は一致していない。

生物学的研究では、認知症の病態変化がうつ病の発症に寄与するのであれば、うつ病が認知症の前駆状態であることを示唆し、うつ病への罹患が認知症の病態変化に影響を与えるのであれば、うつ病が認知症の危険因子であることを示唆する。

本セミナーでは、うつ病とアルツハイマー病、レビー小体病との関連性を中心に、うつ病におけるアミロイドβやタウ、αシヌクレインなどの認知症関連物質に関する研究報告をレビューし、高齢者のうつ病が認知症の前駆状態なのか危険因子なのかについて検討する。さらにうつ病から認知症への移行のリスクを軽減することは可能なのか、可能であればうつ病の治療において、どのような介入が有効であるかについても考察する。